

佳作

## 真つ黒ごげのご飯

宮内瑞穂

お母さん、もう孫もいておばあさんになっている私ですが、あなたはやつぱりいつまでも私のお母さん。お母さん、覚えていますか？真つ黒ごげのご飯を炊いたのを。確か私が小学校一年生の時だったと、記憶しています。

「裏の畑の草刈りに行くけえ、ご飯をたいちよつてね。お米はお釜にしかけてあるから、かまどに枯れ木を入れて燃せばええから」

と、草刈り鎌を持って、出かけて行きましたよね。

遊びたい盛りだった私は、すごく不満でしたが、なぜか「いやだ」と拒むことができず、イヤイヤながら、かまどに焚き木とまるめた新聞紙を放り込み、マッチで火をつけました。庭の方では、近所の子と弟や妹のきやきやと、遊んでいる声が聞こえてきていました。

(どうして私ばかり用事を言いつけられるんじゃないか。お姉ちゃんって、損だなあ)

ふくれっ面をしながら、枯れ木をどんどんかまどに投げ込んでいきました。お釜からじゅうじゅうと音を立てて、沸騰した米汁が流れ落ち、それがご飯が炊けたことを意味していた事を、その当時はこれっぽっちも知りませんでした。

「始めチヨロチヨロ、中パツパ。赤子泣いても蓋とるな」

そんなご飯炊き用語があつたなんて、教えてくれてもいませんでしたよね。だから焦げ臭い匂いがしてきても、火力を緩めず、木をどんどんくべる私でした。

「何をしちよるんかね。畑までこげた匂いがしてきたので、帰つてきてみたら、ご飯が真つ黒ごげじゃあ。これじゃ、食べれん」血相を変えて帰ってきて、お釜の蓋を取り、私を叱りとばしたお母さんでしたね。ムリやり手伝いをさせられて、その上、役立たずと怒鳴られて。辛くて悲しくて、泣くしかありませんでした。

「みずほは決して悪くはない。ご飯の炊き方を知らなかっただけ」と、あの時慰めて欲しかったです。お母さんは、カツとなつて私を怒つたのでしょうか……。

今は炊飯器があり、失敗なくご飯を炊いています。真つ黒ごげご飯は、お母さんとのなつかしい思い出です。